◇天孫三人（饒速日、天火明、火瓊瓊杵）／忍穂耳と天孫の天降り

①「記紀」や『先代旧事本紀』を丹念に調べると、天孫（皇孫）は高千穂宮から吾田に降臨した火瓊瓊杵独りと思いがちだが、饒速日と天火明（彦火明）も天孫だったのは紛れもない事実だ。

この二人は火天神天鹿児山（天照大神の嫡子）の腹違いの天孫として生まれ、成長後、二人揃って忍穂耳に養子入りして、そこでも天孫（皇孫）と呼ばれてきた。

その一人、饒速日は、『先代旧事本紀』に天照国照彦火明櫛玉饒速日として登場してくる。

「天照太神、詔して曰はく、『豊葦原の千五百秋の瑞穂国は、吾が御子、正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊の知すべき国なり』と言寄さし詔ごと賜いて、天降したまう時に、高皇産霊神の児思兼神の妹万幡豊秋津師姫命（栲幡千々姫）を妃と為して、天照国照彦火明櫛玉饒速日尊、誕生す」

もう一人の天孫天火明は、海部氏系図本系図に、始祖彦火明―〇―〇―三世孫倭宿禰―武振熊とある海部氏始祖の彦火明のことで、『日本書紀』にはこのようにある。

「天忍穂耳尊、高皇産霊尊の女、栲幡千千姫を娶り、妃としたまいて児を生ましむ。天照国照彦天火明命と号く。是尾張連等が遠祖なり。次に火瓊瓊杵尊・・」

〔本書の王系譜〕

火天神
天照大神 ―― 天鹿児山 ―― 日子坐王 ―― 彦湯産隅
月読命　豊受姫
水天神　栲幡千千姫
天孫饒速日 ―― 味間見
彦湯産隅
天孫火明
火火出見（火折と皇子交換）―〇―磐余彦（神武）
火スセリ
日神 ―― 忍穂耳 ―― 天孫火瓊瓊杵 ―― 火照（海幸彦、火明、火明饒速日）―― 可美真手

②忍穂耳、及び天孫饒速日・天孫天火明・天孫火瓊瓊杵ら天神の御子は、日神から御璽や宝物を

賜り、天宮高千穂宮から東や南に天降ったのである。以下、時代順に列挙したい。

〔**忍穂耳の天降り**〕、二一〇年代前半、大己貴に攻め立てられた天照大神は、妻の日神と盟約するや、高千穂宮に出向いて高皇産霊と名のり、忍穂耳の大倭降臨を取り決めた。ところが忍穂耳が準備を整えていると、亡き天鹿児山の遺児二人を天孫として押しつけられた。忍穂耳は親元を離れたくなかったのか、自分に代えて天孫（饒速日）降臨を日神に願い出たのだった。

〔**饒速日の天降り**〕、そこで、天孫饒速日が瑞宝十種、火天神の御子と印す天羽羽などを賜って大倭国鳥見に天降り、長スネ彦の妹を妃に娶ったが、妃の懐妊中に逝ってしまった。

『先代旧事本紀』「時に正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊、奏して曰さく、『僕（やつかれまさ）将に降らむと欲（おも）い、装束う間に生れし児あり。これを以て降すべし』とまうす。詔して之を許したまふ。

天神の御祖、詔して、天璽の瑞宝十種を授く。・・饒速日尊、天神の御祖の詔をうけて、天の磐船に乗りて、河内国河上哮峰に天降り坐し、則ち大倭国鳥見の白庭山に遷り坐す。・・饒速日尊、便ち長スネ彦の妹御炊屋姫（みかしや）命を娶りて妃と為し、妊胎（はらま）したまふ。未だ産む時に及ばざるに、饒速日尊、すでに神損去亡坐（かむさりま）しぬ」、

後日、饒速日が御炊屋姫の夢の中で教えて言うには、『我が児に瑞宝を授けおくように。

ついで登美白庭邑に墓を造り、天鹿児弓・天羽羽矢、神衣・帯・手貫を副えるように』と。

〔**忍穂耳の再度天降り**〕、そこで忍穂耳が降臨しようとしたが、大己貴に潰された。高皇産霊が葦原中つ国平定を決意して経津主・武甕槌ら大軍を出雲に送り込むと、大己貴は平身低頭して国譲りを誓った。その直後、忍穂耳が再び大倭降臨を試みたが、またも大己貴と大物主に邪魔された。

〔**火瓊瓊杵の天降り**〕、二二〇年代前半、父に代わって、天孫火瓊瓊杵が大倭に天降って行こうとしたが、天火明を大倭に迎えたい大己貴らに妨害され、熊襲の吾田に降臨する次第になった。

不憫に思った天照大御神と高皇産霊は、火瓊瓊杵に対して天（日）と日高の一派、日隈を添え与えた上で、高皇産霊名代としての天叢雲剣（草薙剣）・八咫鏡（日隈再興を願う日前鏡）・勾玉など三種宝物、さらに火天神の御子と印す天鹿児弓・天羽羽矢を授けて命じた。

「吾田の日前国は、わが子孫の王たるべき地なり。皇孫、そこに天降って治めなさい。天つ日継ぎを重ねることで、天壌（あめつち）（天地（あめつち））が千代に八千代に栄えますようにと祈りつつ、この八咫鏡を私の御魂と思って祀り続けるように。

天孫には日隈再興を託したのだから、熊野櫛御気野神像の日矛も授けておく」

その裏で日神は、この鏡と日矛に対して日隈・日前再興の願いを心密かに込めていた。

〔**天火明の天降り**〕、この少し前、天孫彦火明は出雲や播磨で大己貴から帝王教育を受けた後、丹後に移った。

【本系図】　始祖彦火明―〇―〇―三世孫倭宿禰―（後世の書き込み十七世孫）武振熊

『播磨国風土記』飾磨郡、「昔、大汝命の児・火明は強情で、行いも荒々しかった。父はこれを憂い、遁れ棄てようと因達の神山に到り、船を出した。

火明が水を汲んで還ると、船が岸から離れていた。火明は大いに怒り、船に追い迫った。このため大汝の船は進むことができなくなり、うち破られた」

③ちなみに勘注系図の彦火明は、天孫天火明ではなく、火瓊瓊杵の児の海幸彦である。

【勘注系図】始祖彦火明―児天香語山―孫天村雲―天忍人（亦の名倭宿禰）―

「記紀」などは火瓊瓊杵と木花開耶姫の間に生まれた三皇子について、このように伝える。

『日本書紀』、火スセリ、火火出見（火折）、火明（火照、海幸彦、尾張連の祖）

『先代旧事本紀』尾張氏系譜、饒速日命亦名天火明命―児天香語山命―孫天村雲命―天忍人

国造本紀、「天香語山は天照大神のひ孫・饒速日と天道姫の間に生まれた。亦の名は高倉下」

〔火明饒速日の天降り〕、勘注系図の彦火明は海幸彦である。彼は日向から丹波に立ち寄って饒速日も襲名した後、二四七、八年頃に大倭に降臨してヒミコと謁見し、日本家を建てるよう命じられた。

『但馬故事記』、「饒速日は勅と瑞宝十種を奉じて妃天道姫や随身らを率い、丹波真名井原、ついで生駒に天降った。天道姫が丹波で産んだ児を天香語山、そのまた児を天村雲という」

「神武紀」、「塩土老翁に聞きき。『東に美き地有り。・・其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降る者有り』といいき。余謂うに、・・その飛び降るという者は、是饒速日と謂うか」、

「時に長スネ彦、・・天皇に言して曰さく。『嘗、天神の子有しまして、天磐船に乗りて、天より降り止でませり。号けて櫛玉饒速日命と曰す・・』

この饒速日と三炊屋媛は、『先代旧事本紀』の天孫饒速日や御炊屋姫と経歴が異なっており、同一人物ではない。先代の饒速日や御炊屋姫を襲名した人物である。